

② 御所浦島ほか（熊本県天草市）——勇志国際高等学校

島の魅力で立ち直る生徒たち

学校法人青叡舎学院 勇志国際高等学校 校長 野田 将晴

●生徒約一三〇〇人の通信制高校

勇志国際高等学校は、平成一七年に開校した広域通信制高校です。この三月で創立一二年となります。本校は、熊本県内唯一の周囲を海で囲まれた離島の町・旧御所浦町（現天草市御所浦町）の牧島に所在しています。

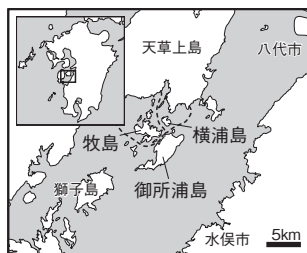
開校当初の生徒数は二四名でしたが、七年目で一〇〇〇名、八年目で一二〇〇名を超え、九年目から現在まで一三〇〇名前後で推移しています。広域（校区を限定せず全国から広く入学希望者を募る）なので、生徒たちは全国各地から入学してきていますが、九州や関東方面が比較的多くなっています。

「勇志の心」と題して「国を愛し、郷土を愛し、人を愛す

る」を校訓に、「一、親孝行する青少年たれ 二、志ある人間たれ 三、誇りある日本人たれ 四、役に立つ国民たれ 五、尊敬される国際人たれ」の五項目の教育方針を掲げています。

通信制高校の生徒たちの日常は、インターネット配信による当校オリジナルの録画授業MST(Multimedia Smart Teacher)を自宅で視聴し、毎月決められた枚数のレポートをパソコンやスマートフォンで提出します。それを先生たちが添削して、指導します。自宅学習の際は、録画授業だけでなくテレビ電話システムなどインターネットでの独自のシステムを活用し、生徒をサポートしています。

高校卒業必要単位の修得のためには、年間に決められた時間の面接授業を受けなければなりません。当校では、牧



天草市御所浦町：御所浦島・牧島・横浦島の有人3島を含む18の島々で構成。平成18年に9市町と合併し天草市となった。牧島は御所浦島と道路橋で連結している。有人3島の面積は計19.13km²、人口2,952人（平成29年1月末現在）。タイやブリなどの養殖、柑橘栽培がさかん。



御所浦の全景。

島にある本校での集中スクーリング（四泊五日、年間二〇回程度実施）を基本としています。関東と福岡では、希望者は地元の学習センターで実施する通学型のスクーリングにも参加できるようになっています。しかし、全体の七割ぐらゐは集中スクーリングに参加している現状です。

●心の壁を取り払う島や地域の力

旧御所浦町は、三つの離島振興法指定有人島で構成される、総面積約二〇平方キロメートルの小さな町です。スクーリングの際、生徒たちは主に八代港から海上タクシーに乗って約一時間かけて同町にある本校にやってきました。

島には都会にあるものは何にもありません。しかし都会から無くなってしまったものがたくさん残っています。美しい海、温かい人情、助け合う人々の暮らし、満天の星空、そして民宿での心のこもったおいしい海の幸のごちそうなど……。

通信制高校の生徒たちの約七割は不登校や引きこもりで苦しんでいた子、あとはその逆で元気が良すぎではみ出した子などです。みんな心の中にバリアをつくり、その中に引き込もって孤立し、苦しんでいる状況は同じです。このバリアを破ることからスクーリングは始まります。そのための舞台装置として御所浦には、最高の条件が揃っていると実感しています。この島の生活すべてが、生徒たちにとってまさに「非日常体験」。これが効果抜群なのです。島に本校を置くメリットの第一はここにあります。

創立から一二年、卒業生は三六〇四名を数えます。この間、生徒たちと真摯に向き合ってきて痛切に感じるのは、彼らは「心の居場所」をなくしていて、孤独の中でもがき



民宿での食事風景。

て長所を伸ばす 二、日本人の誇りを取り戻す」ですが、それはこの気づきから生まれたものです。スクーリング一日目に心のバリアを破ることができるかどうか、成否にかかわる重要なポイントで、もっとも効果的な方法は、ホームルームで生徒たちに「なりたい自分」を書かせることでした。なりたい自分について自問自答することで、嫌な自分ばかり気にしていた生徒たちの心の姿勢がプラスの方向に一八〇度変わります。そこで「なりたい自分こそ本当の自分」だよと教えてあげる。その瞬間、教師が彼らの心

の居場所となるというわけです。心の居場所ができたとき、彼らのバリアは取り除かれます。

●地元と協力したさまざまな体験学習

御所浦の海には子どもたちの心を開かせる不思議なパワーがあると思います。その海を生かしたさまざまな体験学習などを実施できるのが、スクーリングの最大のメリットです。本校の前には、美しく穏やかな入り江が広がっています。そこでは御所浦アイランドツーリズム推進協議会や地元のボランティア団体が「伝馬舟」の伝統を後世に伝えていこうと活動をされています。学校もその団体の皆さんの指導で、伝馬舟漕ぎの体験学習を取り入れており、生徒たちにとっても人気があります。

また夏のスクーリングでは、学校前から船で一〇分ほどの距離にある無人島で、地元の皆さんのご協力で地引網体験を実施します。そこで獲れた魚は、バーベキューの際、みんなで舌鼓を打っています。夏の名物行事のひとつです。魚釣りも体験学習に取り入れています。生まれて初めて魚釣りをした女子生徒などが、何キロもある見事な鯛を釣り上げて感動することもしばしばで、歓声をあげながら楽しい思い出をつくっています。

平成二八年四月の熊本地震は、記憶に新しいところです。当校では、東日本大震災直後から「被災地でよみがえった



地元の皆さんの指導による伝馬舟体験。



地引網体験の様子。



生まれて初めての魚釣りで、大物を釣り上げ喜ぶ女子生徒。

『絆』を忘れないようにしよう」というスローガンのもと、毎月一日を中心に「絆の日活動」を取り入れ、全国の学習センターで公共の場などの清掃活動を生徒たちとともに実施しています。この活動によって、各学習センターでは、地元の住民の方々との交流が生まれ、本校では地域住民との恒例行事になるなど、大きな反響を呼んでいます。本校

の集中スクーリングにおいては、一日に関係なく毎回実施しています。

●生徒たちの期待を超える感動授業を

これまでの経験から得たことがもう一つあります。それは「感動」が人を大きく成長させるということです。当校では、すべての授業が「感動授業」であることを目標に取り組んでいます。子どもたちは、自分の期待通りの授業を受けることができた時、満足すると思います。しかし、そこに感動はありません。彼らの期待を超えたとき初めて感動がある、このことを先生たちは体験的に知っています。



「絆の日」の清掃活動。



スクーリング最終日。地元の方々から紙テープで見送られる生徒たち。

満足は一時的ですが、感動は持続します。そして感動を誰かと共有したいという欲求が生じます。この欲求を行動に移す（つまり身近な人にその感動を話す）時、「利他心」が芽生えるということを知りました。

現在、不登校や引きこもりが大きな社会問題となっており、ますます深刻化しています。その根底に行き過ぎた個人主義があると思えてなりません。利他心は、幼児期から成長するにつれ芽生えていきます。家庭教育も学校教育もこの利他心の成長を促すことが大きな目標でなければなり

ません。なぜなら「心の成長」とは、まさに「利他心の成長」と同義だと思ふからです。

当校で認可をいただいている定員は、二〇〇〇名です。まずは、一年でも早い定員達成を目指します。そして、より安定した経営のもと教育環境をさらに快適なものに改善していきたいと考えています。

●教育分野で地域へ恩返し

当校は、合併前の旧御所浦町の教育特区として誕生、平成二二年に熊本県から学校法人の認可をいただいて今日に至っています。地元御所浦町のご恩を決して忘れることはありません。将来、日本中の不登校の生徒たちや、引きこもりで苦しんでいる人々が、この御所浦という癒しの空間に訪れるようになるよう、そして、この地で心を成長させられるよう、一所懸命に取り組んでいきたいと考えています。それが御所浦の振興となり、恩返しになると思っています。

最後に当校の標語を一つご紹介しましょう。
「喜べば 喜びごとが喜んで 喜び集めて 喜びに来る」

◆島の住民からみた通信制高校◆

それは突然やって来た《黒船》のようでした。平成17年、住民の「何が起ころのだろう、どうも普通の高校と違うみたいだ」という不安と期待を受けながら、勇志国際高等学校は船出をしました。

当時、熊本県唯一の離島自治体だった御所浦町、三千数百人しかいない島。潮焼けした顔の男たち、畑仕事をする女たち、しかも老人が多い。生徒たちの目に島はどのように映ったのでしょうか。また逆に、島人は生徒たちを見てどう感じたのでしょうか。子どもたちの外見には〈ビックリ〉が多々あったと思います。言葉、ファッションの違いもありました。しかし、住民と生徒たちとの間の違和感は、月日とともになくなっていったような気がします。それは、ともに助け合うことを当たり前としてきた島の暮らしがあったからだと思います。

最初は、知らない人にいきなり「こんにちは」と挨拶されて、戸惑う生徒もいましたが、次第に生徒たち自身から話しかけて来るようになっていきました。これは、これまでに経験したことのない、島とのかかわりによる心の変化ではないのかなと思います。

勇志国際高等学校の存在は、御所浦町に多くの〈仕事〉を生み出してくれています。貸切船、送迎バス、宿泊、商店、体験学習の手伝いなどさまざまです。また、生徒たちの存在自体が町を元気にしてくれます。地区の祭りへの参加、イ

ベントなどの協力、そして伝馬舟槽漕ぎの伝承などがあげられます。これらは伝馬舟愛好会との連携のもと、勇志国際高等学校が体験学習として取り入れているものです。

伝馬舟は、小さな木造船。3人も乗ると舟べりは水面ギリギリで、初めて体験する子どもは乗るだけでも大変です。しかも生徒同士はスクーリングの時以外に会うことは少ないとのこと。しかし彼らは、舟が傾くのを調整したり、漕ぎ方を教え合ったりとお互い助け合っているのです。協調性を感じる瞬間です。

生徒たちの宿泊は、島の旅館、民宿、ホテルを利用します。スクーリングによって宿泊業者は、安定した経営ができるようになりました。スクーリング開始当初は、島側が受け入れに慣れていないこともあり、戸惑いもありました。通常のお客様の受け入れと違うので、皆で集まって勉強会などを開いたこともあります。その結果、今日では生徒たちをまるで家族のように、孫が帰って来たかのように思いながら受け入れています。

勇志国際高等学校という《黒船来校》から12年、同校が御所浦町にもたらした変化は大きいと思います。人口減少、限られた仕事、若者の島離れ、そんな島の住民に《黒船》がエールを送っている気がします。

何かができる。何かをやろう。先人たちが守ってきた御所浦で！

(民宿「エンジョイもりえだ」経営 森枝三千尋)

野田将晴 (のだ まさはる)

昭和20年、熊本市生まれ。同39年、熊本県警察官拝命。同45年から2年間、青年海外協力隊としてマレーシアで柔道・逮捕術を指導。同51年、元号法制化運動に没頭するため警察官を辞職。熊本市議会議員(1期)、同県議会議員(3期)を経て、平成17年4月より現職。著書に『教育者は、聖職者である。』(高木書房)ほかがある。